

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	家族 : 戯曲
Author(s)	中村, 政雄
Citation	龍南, 180 : 78 - 93
Issue date	1921-12-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7841
Right	

家族

中村政雄

人物

沼田幸彦 燈台守、三十才位

その弟 欽一、二十五才位

その母 岸子、五十才位

その妹 岬子 十八才位

景、

G 海中の孤島に島の燈台の塔下の一室、白壁の八角形の室の手前の約半分は略す。室の左斜邊に塔上に通する金梯子見ゆ、その後ろ外に通するドア正面海圖貼りてあり、右斜邊に四角の窓、明りは此窓と左側の窓より入る右窓の側にテーブル椅子テーブルの上には本五六冊、額一、二、壁に掛つてゐる。その額の一は亡父の肖像である。右窓は

空、眞夏の雲が見ゆる、時刻は夕づきし頃

凄まじい濤聲、斷續して聞ゆ、幕あくと、母の岸子は右窓の下に安樂椅子に腑向き勝に書物に目を注いでゐる。(可なりの間)此の間斷續に高底のもののうき濤聲、極めて徐々に夕べの色漂ひ来る。

娘の岬子ドアを開け入り来る(質素な服裝である)

(金梯子の邊から、)

岬子——(失望した聲)お母さん！駄目ですの今日も

(母此の時靜かに顔をめぐ)、もうお日様が沈みかけたのに、船の影はちつとも見ぬないの(母の近くに來て別の椅子につく)

母——さう？(靜かに窓の外を見て)ほんとに暮れて來たね(窓から入る光段々黄味を帯びてくる)でも大分霏が下りてゐるぢやないの、これぢや半溼も先は見ぬない！

岬子——でも駄目ですわ。此の霏はほんの今下りたんですもの、私先きから見てゐただけれど、黒いものは鳥の影さへ見ぬなかつたの、

母——ぢや、お前のが本當かも知れない、來なければ

ば仕方がないのだから又明日待ちませう、

岬——(かすかに)ねね(うてむいてひそひそ泣き
いる)(間、濤の音)

岬——お母さんは辛棒強いのねね……………お母

さんはまだ兄さんをお赦しにならないのだけ

母——馬鹿な！急にどうしてそんな事を云ふの。

岬——私、淋しくつて、(間)斯んな荒海の真中の一
本の本もない島の燈台で、何年も何年も暮して、
私の心は何か知ら常も飢^うれてゝゝゝゝゝゝゝゝ、陸の
物と云へばどんなものでも懐かしくて懐かしくて
なりませんの、まして五年も逢はない欽兄さんが
お歸りなるんですもの、私、私待ち切れませんわ
……………だにお母さんは……………(再び泣きじやく
る)

母——岬！岬！お止め、私達を此以上淋しがらせな
いやうにね、お前のやうにさう氣がよはくなつて
は、私がどうして欽一を赦さない事があるものが
ね、たとへ欽一が未だ耶蘇信者であつても、お父
さんを殺したとしても。私達が斯んな所に暮すの
は種々深い理由があるのだよ、夜も晝も波の音を

聞いて、目に陸の影さへ見えない斯んな所に暮す
のは私だつて淋しい、幸彦も淋しい。お前が人戀
ひしがるやうに私達も戀しいんだよ、だのに、ご
うして自分の子の欽一を、耶蘇信者になつてアメ
リカへ出奔したといつて今になる迄も赦さないこ
とがあるものかね、私はいつもいつも念佛申す時
に欽一の事も併せて念じなかつた事はない、私達
のやうに、世の中から虐げられて、それに堪へ得
ない弱い淋しい人間は、せめて親子兄弟の愛の中
に、世間から離れて孤獨に生きるより外には、生
きる道はないのだよ、私達は、たつた私達ばかり
の愛で生きてゐるのだよ、欽一を赦さないなんて
ことはしやうとしたつて私達にできふことではな
い、……………欽一も丁度お前の様な性質があつた
あんまり自分の感情が鋭くて、私やお父さんの
本當の心を知ることができなくてあんな事になつ
てしまつたのだよ、

(間、濤の音、黄い色段々濃くなつてくる、)

母——若いお前が、斯んな淋しい所に耐へきれない
のはよくわかる。お前を大きな陸地に放してやり

たい、然し私達だつて破れたのに、あの冷たい世の中へ、私達から離れて出てお前が生きうるかと思ふ、

岬——お母さん！わかりましたわね、もうそんな話は止ませう、

母——あゝ、止さうね、

岬——今日は珍らしい風でしたのね、今日は蝶々が灘わたりをしてゐましたの、一匹！翼をちつとも動かさないで、ふわ／＼と木の葉のやうに揺れて眠つたやうに此島にちつとも寄らうとせず又向ふに越れてゆきましたの、又笑はれるか知れないけれど、きつと兄さんは今日お歸りになると思ひましたわ、

母——又お前のお呪ひだね、（頬笑生）

岬——でも蝶々でもお見舞に来てくれるのはどれだけうれしいか知れませんか……ほんとに此の蝶々へ陸地への言づけを頼みたい氣になりますの、今頃はまだ海の空を漂つてゐるでせうね

（此頃段々室暗くなり來り大きな、ま紅な太陽が窓にかかり極めて徐々に夕雲のたなびく彼方

に沈みかゝる）

岬——ほれ！お母さん！夕日が

（母ふりむく、岬立ち上り二人沈黙の中に眺めている、逆光線の中に、二人の姿ぼんやり浮く、室の隅々から紫の靄漂ひ段々暗くなつてくる、濤の音たゆく響く、間）

幸彦——（薄暗くて姿はよく見ぬか鐵梯子を一、二段塔上から下りたあたりから、）みさき！（二人ふり向く）燈台に燈をつけるから一寸上つておいで（素朴な聲）

岬——はい、今直に、（室を横ぎり 金梯子を上つてゆく）

（母は夕陽の光に書物に目をおとす、窓の外を海鳥啼いて過ぐ、次で又喧しく一群の海鳥過ぐる。間、濤聲）

幸彦——（金梯子をおりてくる）大分暗くなつた、危いよ

（幸彦は窓の側の椅子につく）

母——今日は穩かな夕べだね、

幸彦——ね、斯んな日は滅多にありませんね、

岬——兄さん！蝶を飼ふわけにはゆかないでせうか
幸——なに、蝶！でも居やしないぢやないかそんなもの、

岬——ちや今日蝶が灘を渡つてお見舞に來たのは御存じないのね

幸——ふん（頰笑む）なるほど、然し今日のは知らなかつた。

岬——今日のは楊羽蝶でしたの、とりや綺麗な

幸——灘を渡る蝶は皆美しいな、此處までだつて陸から三十哩も渡つてくるのだから、随分強いもんだね、

岬——風の日は大抵澤山渡るでせうねね、たつた。

こんな小さい島の上さへも一匹通つたんだから、それが皆な此の島の上に集まつたらごんなに綺麗でせうねね

幸——此の島に草花でも育つなら蝶も集まつてくるだらうがね、でなけりや飼へまいね

岬——陸から土を持つて來てもらつたらどうでせう
幸——この間のやうな暴風雨がくりや、一たまりもなく浚はれるだらう、

岬——さうねね、百二十尺もあるのに此處の窓まで浪があげたものねね、

母——ほんとに……今日のやうな風だと陸にゐるやうな氣がするのだけれどね

岬——鳥でも飼つたらどうでせう、

母——それやよからうね

幸——九官鳥でも飼ふかな、然しそれにした所で、青物がなくちやなるまい、玄武岩の黒い岩より外には何一つないのだからねねそれに白い此塔が聳てゐるばかりだ、

岬——ちや鳥も飼へないわねね、何一つ私達の望の應ふものはない、

母——もう灯をつけちやどう？

幸——あゝ、さうですねも少し此の儘にしてをりませうか、

（窓にもたれ幸彦外をながむ、

幸——海はまだ大分明るい……（聲は外に響く、明りの變化は一刻も止まず段々暗くなつてゆく然し極めて徐々）

少しうねりはあるが實際静かですわね、今日の波

は、お、鰯が大分群れてゐる。

(沈黙續く、此時汽笛の長い音ま下より響く、)

三人一度に驚きの聲を發す、)

幸——お、(振かへり)汽船だ！

(幸彦は塔上に駆け上り、岬子はドアを排して戸外に駆けいつ、また短い汽笛、母は一度立ち上り又椅子につく)

母——違ふ違ふ、また航路の汽船だらう、來ると通知は來て居つても、さう汽船が思ふやうにゆくものぢやない、……………

(はるかに、二三の變つた聲で、オーイオーイと呼ぶ聲聞ゆ)

でもどうした船か知ら？ひよつとしたら、……………

……………(立つてドアの所までゆきドアの口より眺む間、)

(此時幸彦金梯子を下りてくる、)

幸——やつぱり駄目だった。(母に)若しやと思つたんですがね、ありやKの港から來た海水浴客の遊覧船ですよ、

母——でもあれの中に居るかも知れない

幸——然し欽一はIの港から來るんですから

母——さうだね

幸——まあ呼んでみませうか、

(幸彦外に出づ、やがてオーイと叫ぶ、再び岬子の聲も雜り、オーイと呼ぶ、向ふからもはるかにオーイと答ふ、間、幸彦入り來る)

幸——やはり居さうには見ねませんよ、

母——今日はむづかしかつたんだね、

幸——來るなら、I港の烏帽子九に定つてゐますからね、大方今日來るだらうとは思つたんですけれど、然し今日來なくとも明日は間違ひありませんよ、でないで第一食料や水がきれかけてゐますから、

母——おや！もう動き始めた、

幸——何に、島を廻るんですよ、

母——たかつた蠅のやうに黒く人が見ねる

幸——人の姿は懐しいものですね、生き生きした人間の息の香に觸れて見たい氣がしますね、

母——上陸るんだらうか、

幸——さあ、人は上陸りたがつてゐる様子ですが

母——此の風だから岸につけると思ふかね、

幸——でも、あの船ちや、巖に一つゴツンといけばそれつきりですから、そしてもう遅いから、上陸する暇はないでせう……お！大分廻つた、もう西の窓から見えますよ（間）

（二人室の中央に入り来る）

母——岬子はごうしてるのだらう？

幸——巖の上から熱心に見てゐましたよ、黙つて、

（二人窓の側の椅子につく）

母——彼女も可憐いさうだわ、淋しさうにしてゐるよ、

幸——さうですわね、

母——先つきはね、欽一の船が来ないと云つてどう
どう泣き出して、手古摺らしたよ

幸——（頬笑み）さうですか、僕のやうに人嫌ひな變人さへ、此處へ住めば、人か戀しくてならないのだから、無理はありませんね、（岬子入り来る）

岬——兄さん！船が窓の下を通りますよ

幸——（窓から外を見て）お、ほんとう、もう、波の色が暗くなつたね、双眼鏡を借してごらん、

（岬子、壁からとつて来て手渡す）

岬——兄さん！あの船は島を廻つたら着くでせうね、

幸——着けるもんかね、あの船で、

岬——ね！（ちつと驚いて悲しさうに兄を見つめる）
幸彦双眼鏡をはづし、岬の見つむるのを知る）

幸——波は静かだけれど、あんな脆さうな船ではつけまい、それにあの舟は今日中にKに着かねばならないし、もう遅いのだから、

岬——（稍々落ちついて）でも上陸させたいのね、
（幸彦と代り窓邊にゆき双眼鏡をとり、）誰か泳いででも来てくれればいいに、船に置き去りにされたら留めておくのにね、誰かハンケチを振つてゐますわ、オーイと呼んでゐますよ（聲きこゆ、間再び前より微かな聲、………静けさを破つて異様の響をもつた汽笛長く鳴る、）

幸——あ！もう出帆だ、どうどう寄らなかつた。

岬——どうどう行つてしまふかね、

幸——（殆んど、とつぷりと暮れる（間）濤聲、
幸——中央のガスランプに點火、室急に明るなる、

テーブルの上の書物を棚にうつし、テーブルは室の中央に持ち来て、岬白布をかけ室の隅の台の上にあつた食器をテーブルに置く、皆申し合せたやうに食卓につく、浪少しづつ荒くなつてくる音

幸——（食事しながら耳を傾け）潮がさすらしいですね、あの浪の音では

母——今頃からさすんだつたら、もう満月近いんだね

（がすランプ灯り眞暗であつた窓は月光が空に流れて彌々明るく青白光を呈し、左の小窓の線は月光が見ゆ、）

幸——岬子！ 欽兄さんも明日はま違ひなく歸るよ、

岬——今日は私ほんとに幾度もがっかりしましたのでも種々なことがあつた日は何にもなかつた日よりも、淋しくはないわね、

幸——私達の生活には、觀覽船の來ることも家出した弟が歸つてくることも大事件だ、欽一のことを思ひだすと、五年前のことが歴々と目に浮ぶ、もう然し欽一を私達から奪つた運命にも、欽一がクリスチャンになつたことにも、冷酷な世間にも惡

しみはない。憎しみを懷いて生くることは淋しい此上淋しい生活にはもう耐へられない。（間）。自分が生活のどん底に下ればもう求める者は愛ばかりしかない、腹が立つ間はまだ愛を知らなかつたまだ本當に生きることの淋しさを知らない故たつた。（間）世間がないと私達は眞人間になれる。私達はちつとも自分を詳る必要もなく、野心をおこす餘地もない。ほめる者も貶す者もないから人の思惑に煩はされる事もない。人間は皆ありのままでありたいと自分では願つてゐる。然し人の前に出るとその本當の願は満され難い、此の離れ小島は世の中になくてはならない所だ、本當の生き方を一番自然に行へる所だ、そして世の中で一番大切なものを知る、生活するになくてはならないものを悟る。私達の全靈が強くそれに憧れるので、いつとはなしに悟るのだ（間）ここでは私達三人の間の愛が一番尊いことをよく知つてゐる。それは淋しい中に住んでゐるからだ廣い人間の社會のあることを知つてゐるから、此の島の生活は淋しい私達が大きな人間の世界のあ

ることを知らなければ、此の小島を世界の全部と思ひ、此の小島の生活に不足なものに氣がつかない。廣い世界への憧れの心がないから、私達が生きるに於てならない愛を破つて、苦しみながら救の道を見出すことができない。私達が人間の社會のあることを知つて、その強い憧れに今の生活の淋しさを感じてゐることが、私達の生活を救つてゐる唯一のものだね、お母さん、たとへば飲一がどんなに私達に苦しみを負はしたとしても、もし私達が赦せるならば私達の幸福はやぶれません、愛せないことが一番不幸だと感ずれば、どんな事でもゆるめますね、

母——お前達がさう云つてくれれば嬉しい、あれの事を思はぬ事はなかつたけれど、不幸の子の悲しさに、あれのことをあまり口に出して云へなかつた。

岬——今夜あたりはここにゐられるでせうね、私只はやく會ひたくてならないわ、

(間、濤聲、岬子耳をすます、母、幸彦は食事をつづくる、)

母——飲一も二十五だね……

岬——お母さん！一寸(制する)……波の音が聞えませんか、

母——(耳をすまし波の音す)波の音より外に聞えないね少しは風もあるか知れないけれど、

岬——否、船のスクリュウの音が、

母——それやお前の氣の迷でせう

岬——さうですか知ら、船の音が聞える筈はないけれどね、(食事をつづく)

母——飲一は出る時があんなにして出たんだから私達がまだ怒つてゐると思つて、さぞ敷居が高いことだらうね、

幸——僕らは斯うして待遠しいほどの思で待つてゐるけれど、飲一は歸つてくるにも、叱られることを豫期してゐるでせうでも叱られることを豫期しながらも親や兄妹(きょうだい)のもとであればこそ歸つてくるんですね

母——飲一はまだお父さんが亡くなられた事は知らずに居るだらう

幸——知る由もないでせうね、

母——あの時はお父さんのあんな死で一時はするぶ
ん欽^{あね}一や、欽^{あね}一をつれさつた宣教師に腹を立てた
もんだねわ……………

幸——人間は自分の弱いことに仲々本當にはきづき
得ないから猶更憐れですね、

(間、濤の音)

岬——兄さん！一寸、ちつと聞いてごらんさい！
確かに船が來ますよ、今鎖を落したやうな音がし
てよ、

幸——(耳を澄し)うむ、さうのやうでもある

母——ほんとうかい！

(緊張した沈黙、數秒經て汽笛ひびく、)

三人——あ！(一度に喜びの色湧く)

幸——あれは鳥帽子丸だ！

(食事の碗をおき、先づ岬子外に走り出で、次
で幸彦母走り出づドア明け放しのまゝなれば月
光見ゆ、間、濤の音)

幸——(外で)おーい鳥帽子丸よう——

聲——(間をおいて、遠く、船よりの答)おーい、
(母と押子入り來る)

岬——お母さん！

母——やつと來たねわ

(母食器を片づけはじめ、)

岬——一寸私失禮しますわ(食卓につき茶をかけて
碗の飯を食べ終る、ついで食器をかたづけ、白布
をふるひ、又かけながら)でも兄さんが乗つてゐ
られなかつたら……………

(船員紅い包のハムと、包をもつて入つてくる)

船員——今晚は、

母——おや俊さん！今日は船が大變遅かつたねわ、

船——朝つから出たんですがなあ、寄り所があつた
もんですから……………米や飲料水なんか外の奴が持
つて來てゐますよ、それからお客さんが一人御い
でますよ、

岬——わ！ちやきつと兄さんだね

船——ねね、若いお方が

岬——やつぱりだわ、

母——俊さん、有難う、今日は朝から船を待ちくた
びれてゐたんですよ、アメリカに行つてゐた幸彦
の弟が歸るんでねわ、

船——あゝそりや御目出度う御座すな、買物は此處

へ置いときますよ、お客さんの荷物一つ上げにや
ならん、

(船員出づ、平靜な沈黙の間、他の船員一、二
ドアの外を通りすぐ)

船一——伯母さん今晚は！

船二——お嬢さん今晚は！

(同じ平靜な沈黙の間、波の音は弱くきこゆる)

欽一——ドアの所に音もなく現はれしばらく、躊躇

し、覗ふやうにする、服装は派手ではないが、
アメリカ歸らしい様子を失はない小さい鞆を
さげてゐる)

欽一——(低い聲)御免下さい！

二人——……………(二人にはよくきこえず)

欽一——(金梯子の後ろまで進み、前より少し高い
聲で)御免下さい！

二人——わゝ(二人ふりむく)

(欽一は此の時全身を現はす)

母——お！……………(からだだけ少し前に傾け)

欽——お母さん！(その位置のまゝ)

母——(一步踏み出し)欽一！

(欽一、突立つたまゝ躊躇つたやうに動かぬ)ま
あお前 こつちへおいで……………

欽——……………

母——よう歸つてきた。(側に近よる、)そんなにか
待つてゐたよ

欽——お父さんもおうちですか？兄さんも？

母——わ？……………あゝ皆なお前を待ちこがれてゐ
たよ、

欽——(安心した寛いだ態度で)あゝやつとおちつき
ました。(室の中央に出てくる)

岬——(緊張した氣分に吞まれて固くなつてゐたが
言葉を出すゆゑを得て)兄さん！よう御歸なさ
いました

欽——あゝ岬さん！(しみじみと見て、)ほんとに大
きくなつたね

母——岬子がお前の待ち方つたらね、

欽——もつと早く着くだらうと思つたんですがこん
なに遅くなつてしまつて……………(あたりを見まは
しながら)船の中で、ここの燈台もはるかに見

てゐたんですが来る迄に日が沈んで、こんどは月の明りに此の燈台の灯を望んでやつて來ました。

薄闇の中にぼつと此處の灯がついた時はほんとに懐しく感じました。あの燈台の灯をつけられたのは兄さんだらう、あの中にはお母さん方がゐられる、としみじみと思つたのです。(間、濤聲)大きな浪の音が聞えますね

母——晝も夜もあの音ばかりですよ、

(三人テーブルをかこむ)

母——大變丈夫になつたやうだね、

欽——お蔭様で、躰は丈夫になりました。

母——もう外には何にも云ふことはないよ、丈夫で歸つてくれたんだから

欽——はい、——(間)

(幸彦入つてくる、皆振向く)

母——(低い聲)お、

(欽一立つ、)

欽一——兄さんですか………歸つて參りました、

幸——うむ、よく歸つた。待つてたよ、これで一と安心だ、(皆テーブルにつく、母を間に挟み幸彦

と欽一は斜に面す、)ごうだね、浪音が耳につくだらう、

欽——やはり淋しい所ですね、

幸——うむ、實際たまらない程淋しい所だよお前が歸つてくれて斯んなに嬉しいことはない。

欽——僕も斯んなに嬉しいことはありません、兄さん方の聲をきいたばかりでも、そして僕のような不幸者をこんなにして迎へて下さるんですもの、五年前のことを思ふとお詫の申し様もございません。穴にでも入りたい程恥しく存じます。

幸——濟んだことは仕方がないさ、お前がまた歸つたことで償はれるよ、お前が歸つたことがどんなに嬉しいか私達だけにでなくてはわからない……

(船員、欽一の鞆をがたげ入り來る、)

船——お客さんの荷物持つて來ましたよ、

欽——や、有難う、

母——俊さん御苦勞でしたね、

(欽一岬子に金を渡す、)

岬——(船員の側に近より)俊さん、有難う、(低い聲)少いけどね、(金をわたす)

母——今度はいつくるの

船——來月ですな、もう

岬——では來月の注文はこれだけね、(注文の紙片をわたす)

船——ぢや御機嫌やう

皆——さよなら、

(船員去る、間)

欽——お父さんは?

幸——お父さん? あゝお前まだ知らないんだね

欽——では、もしや?

母——もう五年になるよ、

幸——お前が出て行つた年さ!

欽——(間)全く知りませんでした。お父さんもまだ

生きてゐられるものと思ひ入つてゐました。

欽——ほんの今まで信じきつてゐたんですお父さん
にお目にかかつてお詫のできなかつたのが残念で
す……ぢや僕の事が原因になつたんぢやないです
か知ら、

幸——うん、今さら斯んな事は思ひ出したくも云ひ
出したくもないけれど、事實は事實として知らし

ておかなくてはならん、此んな島に燈台守となつて住むやうになつたのも、お父さんの好き好んでの事ではない。お父さんは強い人間ではなかつた社會で一度破れるともう立てなかつたのだ、此の燈台に來てからは、頼にするのは私達只お互ひばかりだ、一人でも私達の兄弟が多ければ心強い、……お父さんは信仰も深かつた、お父さんはお前を頼にする事や信仰が深かつただけに私達よりも打撃はひとがつたお前はクリスチャンになつてアメリカの神學校に行つてしまつた。お父さんにしては來世の國までもお前を奪はれたことになつたんだ、たつた五人の家族からお前が去つた事がどんなに打撃だつたかわかるだらう、そればかりでない、お父さんは兼ねての病氣が急に重くなつて死なれた。お前の事をうは言のやうに云ひ續げられて、欽一をも一度とりかへして、せめて極樂でも合はしてくれと、私達はたつた三人になつてしまつた。お父さんを葬つて後どんな氣持がしたかお前に考へられるだらうか、

欽——……………

幸——その頃は實際お前方を憎く思つた。お前達が

そんな結果を齎しておいて、惡ひ事したと、一寸でも考へるなら却ていい、然し正しい道を行つてゐると自任してこんな苦しみを負はして行くから私達は余計憎かつたのだ。お母さんは、自分の子からこんな苦しみをうけるのが情ないといつて涙を流された。血を絞られるやうな苦しい目を見たんだ、パンを得る道は幾らでもあつたけれど、私は考へることがあつて、此の燈台に留ることに決心した。起きても寝ても荒ぶ浪の音ばかり、一本の木さへない所だ、此處に住て切に欲しいものは慰ばかり、外には何にも要らない、たまたま灘を渡つてくる。さへ懐しくてならないのだ、お前に對する怒や怨は直ぐになくなつた。お前も私達も考へて見れば可哀いさうな者だつたんだ、恵まれてゐる纔かばかりの愛をさへ破つてしまつたんだから、私達は小鳥や蝶の愛をさへ欲してゐる。ましてお前は私の弟だ、お母さんの子だ、肉親の愛を失つて淋しくなくてあられるものか、私達はお前を赦すばかりでなく前よりも一層愛し出したの

だ、

(間、浪の音)

お前はクリスチャンになつた。文藝にも趣味をもつてゐた、お前の住む世界と俺達の住む世界とは違つてゐた。お前と趣味や信仰で理解し合ふことができなかった。それがお前の事件の原^{もと}だつたのだ、お前は趣味を同じくし、信仰を同じくする者とでなくては生きる事ができないと感じて、あんな事に成つてしまつた……………然し考へて見ろ！……………人間にはもつと大事なものがあつた。そんな事はお前といふ者全体のほんの一部分に過ぎない。その一部分のためにもつと大事なものゝを抛つたのぢやないか、親子兄弟といふものは此世に生くるために與へられた最も妙な愛の要塞だ、我々が此の愛を傳統的にうけついでゐる國に生けうけてゐるといふことは非常な幸福だ。我々には仲々人そのものを愛することはむづかしい。人間には絶對の善惡の標準をつける智慧はない。だから眞の愛といふものが、相手の運命をよくするとか悪くするとかの事では定められはしな

い。その愛がどんな結果を齎らさうと、只その愛のうちに居ればよいのだ、それだけ自己の總ゆるものを犠牲にして愛が起るかによつて、愛の程度が定められるのだ、趣味の理解がないから、信仰の理解がないから愛が起らぬといふのは抑々末だそれは美人をのみ戀し、美しい小鳥をのみ愛する自己中心の心に外ならない。其裏に醜さに泣くものがあり、蛇や墓の醜惡な姿をしたものがあることに目を掩ふてゐる愛に過ぎない。世の中には種々な友達がある。信仰の友、趣味の友、學問の友と、そしてお互ひに眞の友情愛情を捧げてゐると思つてゐる。然しそれは自分をのみ愛してゐることにすぎないのだ、自分の信仰自分の趣味を、相手の中に見出して、夫を愛するに過ない。決して相手の人その物を愛してはゐないのだ、未信者といふ名を冠し、稍もすれば信者との區別をおく宗教家の愛が本當の愛か。その外の友にしるお互ひに興味がある間の友情にすぎない。だからそんなもので結ばれてゐる愛は、當にならないのだ、人間は自分が最も惡人になつても、愛してくれる友

がなくては生き得られない、その愛する者を持たずしては淋しさに耐へられないのだ、その時人間は愛を知ることができ、命をかけての友がなくてはならない、少しでも目覺むれば皆人間はそれを求めてゐるのだ、生命の友がなくてはならないお前も五年間外國で苦勞をして來たのだから、よくわかるのだらう、

(間、濤聲)

欽

よくわかりました、自分の輕舉みを思ふと恐ろしくなります。自分の愚かな智慧を信じすぎたのが恥しくなります、私は今に至るまで、その生命の友を見出すことができずして苦しみました。求める心は眞の愛に合せないのかも知れませんが、………教會は罪を赦す所ではありませんでした。罪の判定をする所でした。悔改むると罪なきものになるので、心慍る所でした、………アメリカに五年暮して、何一つ誇を感じて申しあげる事をしなかつたところが、自分の悪い生活から告白しなければなりません。自分の弱い意志から卑しい女と戀に陥ちた爲に教會の信者からは爪弾

きされました、教會は神聖な所なので入れられなかつたのです。私達の戀も本當な愛に成り立つてゐると思つてゐたのに、實は自分ばかりしか愛してゐない青春の情にすぎませんでした。それが満される、もう求め合ふものがなくなつて離れてしまひました。生命の遺骸のやうな戀を續けることができなかつたのですそれから種んな生活をしました。コックをしたり、葡萄園に働いたり、そしてあらゆる種類の人に接しましたけれど求むるものを得る事ができませんでした。深い哲學の思想を語る人はあつても僕を聽手として見出してくれるにすぎません、きいて理解して批判さへすれば人間でなくてもいいといふ有様です生きてゐる事がさびしくてさびしくてならなくなりました、僕は死なうと思つた事は幾度もありましたが、然しまだほんとの生も知らずして死ぬのは、尙更たまらなくさびしく思はれました、その時、僕の心に浮んだのは以前の女と此の故郷です。僕はその女と別れたのが早すぎたのをあとで感じました誰も初めから眞の犠牲的愛を以て愛することはで

きない事を知つたのです。青春の門を一度は通過せねばならないことを知らずに、徒らな眞實張りに、これから眞の愛の生活が初まらうとする所で打ち切つてしまつたのです。僕は自分の小さな信實といふものをかへつて呪ひました。僕はその女をその後探しましたけれどももう全く見出すことができませんでした。そして唯一の故郷ばかりが生きる場所として残つたのです。然し自分の輕舉で仕出かした事が思はれて仲々日本へかへる決心はつきかねました。そして、とても許されはしないだらうと思つたのです。そしてもうほんとうに死なうとしましたけれど、どうも死ぬならせめて戀しい日本の土でも踏んで、又一度うちに行つて見やうと思つたのです。あゝ、やつぱり歸つてきようございました。

幸彦——さうだ、歸つてこなければならなかつたんだ、お前がうちを出た理由は薄弱だつたのだ、憐れな人間は生命の友を見出すことは難かしい。漸く親子兄弟にそれを有するのみだ、それを失はないうやうにせねばならない、親なればこそ馬鹿な子

も罪人の子も愛しうるのだ、

(間、劇しい浪の音、)

欽——さびしい波の音ですね、岬さんには耐へられなかつたらうね、

岬——今日位はいいうちです？此の間はそりあ恐ろしい浪が来ましたの

母——此の島も打ち越す浪が来てね、

欽——つまらないものだけれど御土産をひらきませう、

(艀をテーブルの上にもち來り、鍵などをあけかゝる、此の時、出帆の汽笛鳴る、)

欽——あ！あの汽船も出ますね、

幸——もう船は來月までくる事はないよ！

汽笛の音二度三度長くひびく、浪の音高く低くひびき、皆沈黙の中に幕。

——二〇、十一月廿五日——